

きっと知らないミミズの話

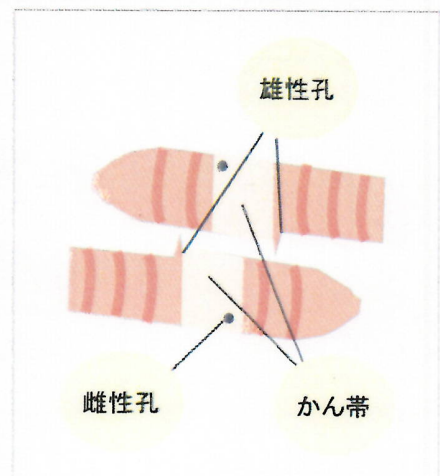


こんにちは、齋藤です。6月になり急に暖かくなり、畑の牧草が伸びてきましたね。まだ見たことのないデントコーンの成長に日々ドキドキしています。どんな実がなるのか今から楽しみです！！最近は草や放牧地に興味を持っています。皆さん、今年が一番草はいつ刈るのでしょうか。出し惜しみすることなく、いつも優しく教えてください農家さん方には本当に感謝できません、ありがとうございます！！

さて、今月は「ミミズ」についてです。良い畑にはミミズが住み着く、と農家さんに聞いたのですが、そもそもミミズは何種類いるのでしょうか…、どうやって子孫を残すの！？気になったので、ワタクシ齋藤、別海図書館（初潜入★）で調査してきました！！

クネクネ、ねばねばして少し気持ち悪いミミズですが、時に大事にされてきた一面もあります。例えば、漢方では乾燥ミミズを「地竜」といって解熱剤として利用していますし、体液に含まれるライセニンという物質が溶血作用、抗菌作用を有することから、現在様々な薬の開発がなされています。またタンパクやビタミンが豊富なことから、乾燥ミミズと小麦粉を混ぜてつくった肉団子が鶏や豚の餌としても利用されているようです。しかもなんと！あのエジプトの女王、クレオパトラ7世はナイル川の豊穡な大地を守るためミミズを国外に持ち出すことを禁じた、といわれています（ホントかな…）。

ミミズは一つの身体に雄の部分も雌の部分も持つ雌雄同体の生き物です。通常そのような生物は単体で子孫を残すのですが、ほとんどのミミズは2匹が交尾して卵をつくります。2匹のミミズがそれぞれの身体にある「かん帯」の部分をこすり



あわせて交尾し、それから1週間後に産卵します。卵胞の中に1～10個ほどの卵ができ(種によって数は異なる)、身体をくねらせながら後ずさりすることで、卵胞を土の中に産みだします。さらに驚くべきことにミミズは産んだ卵の周りにドロの囲いを作り、卵の面倒をみるといわれています。

系統学的には原始的な生き物とされているミミズですが、卵の面倒をみたり、葉の硬さによって引っ張る力をかえたり、巣の入口を便で蓋をしたりするなど、その知能は意外と高いのかもしれません。

放牧の盛んなニュージーランドではミミズに対して積極的な働きかけをしているようです。「ミミズなしでは牧草生産量は草地の持つ力の半分にもならない」、ニュージーランドにおけるミミズによる土壌改良の先駆者、ストックデル氏はこう言います。ニュージーランドではミミズの移植(土着種に加えてイギリスからも持ち込んでいる)を1925年から開始しており、国の事業として行われています。ミミズ移植は、ミミズが多くいる草地からミミズとともに土の塊(30cm角)を切り取り目的の草地に埋めていくという方法で行っており、結果、ミミズ移植による草生産量の増加は100%以上にも達したようです。



ミミズは土や植物、枯れ葉などを口から取り込み、栄養分の高いよい土を便として出します。ミミズの出す糞は砕かれたものがまとまった、ふっくらとして柔らかく、空気が通りやすくなっています。つまり他の微生物が生育し、植物が根をは

るのに最適な条件となっているのです。

具体的に、ミミズを移入して作物を育てると、作物と土の性質は以下のような反応を示します。

作物は、①草丈が伸びる、②カルシウムが多くなる、③根こぶ病などの病気が防げる。

土の性質は、①やわらかく・通水・通気性がよくなる（物理性）、②肥料要素を吸収しやすくなる（化学性）、③土壌動物の多様性が高まる（生物性）。

ミミズ移入が作物の生産量や収量を増加させることは、世界各国から野菜、大豆、麦をはじめ、米、牧草や苗木などの場合で報告され、牧草（クローバー）では4.2倍も（!）増加していると報告されています。

これまで身近な存在でありつつもその生態等はよく知られていないミミズ。今回のM情報から少し興味がわいてきたでしょうか…。

イギリスの博物学者、ギルバート・ホワイト（1720~1793）は著者『セルボーン』の博物記』でこのように記しています。

「ミミズというのは、自然界の連鎖において、ちっぽけでいやしむべき存在のように見える。しかしなくなってしまうたら、その重要性を思い知らされるだろう」。

一見、何も考えておらず、何も働いていないかのように見えるミミズですが、私たちが思っている以上に貢献してくれているのかもしれない。皆さんの畑には何匹住んでいますか？意識してみても面白いかもかもしれません。

齋藤 歩